躍をもたらすことは疑いない。

ところで、史料集の刊行にさいしては、収載された原史料自体の価値がそのまま刊本の価値になるわけではない。まず正確であることが要請されるのはいうまでもないが、いかなる形態に編纂され、また原本の状態をつたえるためのいかなる配慮が加えられたかが重要であつて、ばあいによつては、せつかくの刊行の意義もとぼしくなることがある。この点、編者が、新発見の全文書を原則としてすべて年代順に配列されたのは、従来の史料刊行の例からすれば決断を要する処置であるが、利用者の実際からは至便な配慮であつた。また、文書の形態や文書の状態をあらわす符号についても、独自の工夫が示されており、『百合文書』との関係や年代推定を説明する註記とともに、きわめて懇切である。原本以外のものを一様に案文とせずに「案」と「写」とにわけて文書名を掲げたのも、注意される。欲をいえば、頭注が比較的場当り的な印象を与えるが、これも過剰になつて史料刊行の使命を逸脱するよりはましである。花押・印章の模刻はやはりあればよかつたとおもうが、これは完成時日と定価にさらに脅威を加える結果になるのかもしれない。しかし、いずれにしても、史料を刊行するについての、編者の細心の配慮のみならず独自の見識が示されていることによつて、かえつて原本がいきいきと伝えられているようにおもわれる。

この種の刊行が、原本の整理と原稿の作成から印刷・発行にいたる全過程に、さまざまな困難を伴うことは、あえて詳言するまでもあるまい。その困難をのりこえて刊行に尽力されたすべての方々の労苦に、なによりも感謝したいが、しかし利用者としてのわれわれは、身勝手にも一日もはやく文書全体を手にすることをねがうのである。きけば『教王護国寺文書』総数約三一四〇点（塵長以前。他に近世文書約五八〇点は印刷されない）は、六巻の予定で刊行に六年を要するという。待遠しくても、予定どおりの刊行でさえたいへんな仕事である。この機会に諸方に流出散在している東寺文書や『白河本』『古文零聚』なども別本として集録してはなど、編者にいろいろ注文はつけられようが、いまはただ、ともかくも予定どおり全篇の刊行が果されるのを祈つて、蕪雑な紹介の文をおえたい。

（A5版、本文12ポイント一段組、八六八頁、図版四葉、昭和三五年三月　平楽寺書店発行、定価二五〇〇円）　（黒田俊雄）

滋賀県市町村沿革史　第四衙

本書は昭和三〇年の町村大合併を記念して編纂されたものである。

監修の宮川満氏と甲斐英男・朝尾直弘氏等の歴史研究者、小林博・山澄元・木村辰男・井戸庄三氏等の地理学研究者及び滋賀県の中島守利氏が編纂にあたつている。その内容は滋賀県の全市町村についての原始古代から現代にいたる沿革、とくに明治二一年の町村制施行以後について詳しい記述が見られる。

歴史的概観の部分は県下の旧江戸時代村落の全部を採訪したというもので、近世文書も豊富であり、所蔵者が一々明記されているので簡潔ながら県下の史料綜覧の観をなしており歴史研究者にとつて甚だ便利である。なお重要な文書は写真が掲げられており、全部読下し文がついている。

本巻は長浜市・坂田郡・伊香郡・東浅井郡高島郡の一市一三町五村をおさめており、江北中心なので近世初期の交通路などとくに興味深い。

地理学専攻者がメンバーに多いためか自然人文にわたる地理的記述の多いのも特色であり、全体の構成は各町村ごとに次のようになつている。①概観（自然的歴史的概観）②市政の動き（区制、連合戸長制、町村制・大合併にいたるまでの経過・町村財政・主な事件）③人口と戸数（産業別内訳）④産業の発達（農・工・商・とくに家内工業の展開についてくわしい）⑤交通・⑥教育と社寺

各村ごとに必ず記してある事項のうち主要なものをあげれば

a、行政区画の変遷表（寛永一一年から現代までのもので、江戸時代の領主関係・明治初期の複雑な行政制度の転変が一目にわかるように整理されている）

b、合併以前の旧町村首長一覧表（氏名・出身字・職業・在任期間）

c、合併以前各町村戸数人口表

d、同米生産高表

e、農家階層変遷表（自小作地・所有及び耕作規模別農家階層構成表）

f、寺院・神社一覧表

g、学校変遷一覧表

以上であるがとくにeの農民階層構成に関する統計資料が大正初期から現在までにわたつて整理されている例は町村合併を契機として各地でさかんに編纂されている町村誌のなかにも例がすくなく、本書がそれを全県的規模で各町村別に行つていることは、商工業に関する詳細な記述とあわせて近代農業経済史の研究に貢献するところ極めて大きいと云える。

町村合併・地方事務所の廃止等の行政制度の改革によつて明治初年以来の地方行財政・経済資料の散逸のおそれが増大している今日滋賀県においてこのような試みが実を結んだことはまことに喜ばしく、他府県各町村おいても同様の体系的な町村史の企画がおこなわれる事を願つて紹介の筆をおく。（A5判一一四六頁　昭和三五年七月　滋賀県市町村沿革史編さん委員会刊　非売品）（有泉貞夫）

小野川秀美編
金史語彙集成　上

われわれ東洋学の一端にたずさわる者にとつて三十年前とかわりなく、今日でもなお同じ時間と労苦をくりかえしていることの一つは、漢文原典よりその必要な語句をもとめる場合の検索である。ただ一句を探すために、大部の漢籍を一枚々々と、くりひろげることの大儀さは、すでに同学の諸士が深く味わつておられることであろう。まして東洋学の基本的文献である十三経とか、あるいは二十四史とよばれる正史類などには、ほとんど毎日厄介になる。さいわい十三経については、中華書局から索引が出ていて、これでかなり楽にはなつたが、正史になるとすべてはそのようにいかない。かつて燕京大学より史記・漢書・後漢書などの索引が出て、その一部の労からはいささか解放されたが、二十四史全部には到底及んでいないのである。ところが今回思わぬ朗報がもたらされ、その一つが解決された。すなわちこの『金史語彙集成』（上）の刊行である。

本書は昭和のはじめ、東方文化学院京都研究所が開創されてまもなく着手された事業の一つである。聞くところによれば、当時狩野直喜博士や羽田亨博士らの唱導によつて、京大文学部や前記研究所において、新鋭の学者がそれぞれ史記・漢書・後漢書のいわゆる前三史、および遼史・金史・元史の後三史の索